

砂漠の町とサフラン酒

小川未明

青空文庫

むかし、美しい女が、さらわれて、遠い砂漠のあちらの町へ、つれられていきました。疲れているような、また、眠いように見える砂漠は、かぎりなく、うねうねと灰色の波を描いて、はてしもなくつづいていました。

幾日となく、旅をすると、はじめて、青い山影を望むことができたのであります。

そのふもとに、小さな町がありました。女は、そこへ売られたのです。女自身をのぞいて、だれも、彼女のふるさとを知るものはありません。また、だれも、彼女の行方を悟るものとてなかったのであります。

彼女は、ここで、その一生を送りました。サフラン酒を、この町の工場で造っていました。彼女は、その酒を造るてつだいをさせられていたのです。

月が窓を明るく照らした晩に、サフランの紅い花びらが、風にそよぐ夕方、また、白いばらの花がかおる宵など、女は、どんなに子供のころ、自分の村で遊んだことや、父母の面影や、自分の家の中のようななどを思い出して、悲しく、なつかしく思ったであります。

いくら思っても、考えても、かないものならば、忘れようとつとめました。彼女は、

生まれたふるさとのことを、永久に思うまいとしました。また、育てられた家のことや、村の光景などを考えまいとしました。

美しく、みずみずしかった女は、いつとなく、堅い果物のように黙って、うなだれているようになりました。人がなにをきいても、知らぬといいました。

「この女は、つんぽではないだろうか？」

「あの女は、きつとおしにちがいない……。――」

そばの人々は、皮肉にも、彼女をそんなようにいいました。

彼女は、まだそれほどに、年をとらないのに、病氣になりました。そして、日に、衰えていきました。

「どうせ、わたしは、家に帰られないのだから……死んでしまったほうが、かえって幸福であろう。」と、彼女は思いました。

しかし、彼女は、なにも口にはいわなかったものの、胸の中は、うらみで、いっぱいでありました。どうかして、このうらみをはらしたいと思いました。

彼女は、小指を切りました。そして、赤い血を、サフラン酒のびんの中に滴らししました。ちやうど、窓の外は、いい月夜でありました。びんの中では、サフランの酒が醸され

て、プツ、プツとさきやかに、泡を吹く音がきこえていました。サフランの酒の色は、女の血で、いつそう、美しく、紅く色づきました。

女は、それから、まもなく死んでしまったのです。彼女の体は、異郷の土の中に葬られてしまいましたが、その年のサフラン酒は、いままではなかったほど、いい味で、そして、美しい紅みを帯びていました。

いい酒ができたときは、その酒を種子として造ると、いつまでも、その酒のようにできると、いい伝えられています。この町の人は、その酒の種子を絶やしてはならないといつて、珍しく、いい色に、いい味に、できた酒をびんにいれて、地の下の穴倉の中に、しまつてしまいました。

この町のサフラン酒は、ますます特色のあるものとなりました。女は、とうの昔に死んでしまったけれど、その血の色を帯びて醸される酒は、幾百年の後までも、残っていました。そして、その魔力をあらわしていました。

砂漠の中の町……赤い町のサフランの赤い酒……それは、いったい、どうした魔力をもっているのでしょうか？

* * * * *

砂漠さばくの中の赤い町あかまちは、不思議ふしぎに富とんでいました。それは、人間にんげんの生き血いきちを吸すうからだといわれていました。また、その町まちは、魔女まじよの住すむ町まちだといわれていました。美しい女おんなが、たくさんいるからです。美しい女おんながたくさんいるというよりは、この町まちの女おんなは、みんな、不思議ふしぎに美しいものばかりだといわれるのでした。そのわけは、もと、この町まちの女おんなが、南から、北きたから、また東ひがしから、世界せかいの方々ほうほうから、さらわれてきた、種族しゅぞくのちがった、美しい女おんなたちの子孫しそんであるからです。長い間ながあいだに、異ちがった種族しゅぞくの種子たねと種子たねとが結び合あって、いつそう美しい人間にんげんが生まれたことに、不思議ふしぎがありません。

いつしか、砂漠さばくの中に、赤い町あかまちがあり、そこには、味のいいサフラン酒しゅがあり、きれいな女おんながいるということが、伝説でんせつのように、世界の四方せかいほうに拡ひろがりました。あるものは、それを信しんぜずにはいられませんでした。また、あるものは、それを疑うたがわずにはいられませんでした。

しかし、砂漠さばくを越こえていくと、あちらの山やまに砂金さきんが出でるということ、また、いろいろの宝石ほうせき類いが出でるということだけは、たしかでした。

ダイヤモンドや、ほかの宝石ほうせきなどが、ときおり、砂漠さばくのあちらから、送おくられてきたからです。

どこの国でも、いつの時代でも、若いものは冒険を好みます。また、働いて身をたてようと思ひます。広い、広い、砂漠のはてから、砂金や、ダイヤモンドや、また、いろいろな珍しい寶石が出るということを聞くと、彼らは勇んで、それを掘りに出かけようとしたのでした。どんなに、その旅が長く、つらくとも、出かけようとしたのでした。

らくだや、羊に、荷をつけて、彼らは、砂漠の中をあるいていきました。毎日、毎日、同じような単調な景色がずっと続きました。そして、むし熱い風が吹いていました。

「まだ、水のあるところへはこないだろうか？」

「まだ、あちらに山が見えないかしらん。」

こうして、彼らは、旅をつづけていきますと、ある日のこと、はるか地平線に、青い山の姿をみとめたのであります。彼らは、どんなにうれしかったのでありましょう。たちまち元気が恢復しました。はやく、あの山へいつて働こうと思ったからです。彼らは、ぴかぴか光る黄金色の砂を幻に見ました。また、すきのさきに、きらきらと光る石のかけらを空想しました。赤い宝石や、ダイヤモンドの数々が、自分らの掌の上で輝いている有り様を想像しました。みんなは、道を急ぎました。赤い町が、やがて彼らの目の前にあらわれたのです。

砂漠さばくの中の赤い町あかまち、それは、まったく夢の世界ゆめせかいでありました。サフラン酒しゅは、あふれていました。美しい女うつくおんなが、唄うたをうたいながら、町の中まちなかをあるいていました。南方なんぽうの夜よるは、あたたかで、月つきが絹地きぬじをすかして見るみように、かすんでいました。

「このお酒さけを召しあがると、疲れつかがなおってしまいます。」と、美しい女たちうつくおんながいました。

みんなは、喜んで、サフランの赤い酒あかさけを飲みました。すると、女たちおんなのいったように、たちまちのうちに、疲れつかがなおってしまいました。ほんとうに、いい気持ちきもちになつてしまいました。

「なんという紅い、美しい色いろだろうな。」といって、若者わかものはコップの酒さけを、燈火あかりの前まえへ掲かかげてながめたりしました。

元氣げんきを恢復かいふくすると、彼らかれは、いよいよ山やまの方ほうに向むかつて、働きはたらきにくくために出しゅつ発ぱつしたので。彼らかれは、山やまへいつて、岩いわを砕くだいたり、土つちを掘ほったりして働きはたらきました。

しかし、いつまでも、遠い他国とおいたこくで、暮くらすという気きにはなれません。彼らかれは、ふるさとが恋こいしくなりました。そして、すこしでもたくさん、金かねをためて、故郷こきやうに帰かえつて、家うちの人々ひとびとを喜よろこばし、安楽あんらくに日ひを送おくりたいと思おもつたのであります。

彼らは、ふたたび、砂漠の中を旅をする用意をして、山から出て、ふもとをさして急ぎました。赤い町が、「いまお帰りですか？」というように、目の前に笑っているのでありました。

「くるときに、この町で、サフラン酒を飲んだが、その酒の味は忘れることができなかった。どれ、ひとつゆつくりと酒を飲んでいこう……。」

彼らは、町にはいると、赤い酒のコップを手にしました。

酒場の前を、美しい女がやさしい、いい声で唄をうたつて通りました。ちょうど、その唄の声は、海で潮のわく音のようであり、女たちの姿は、春風に吹かれるこちようのごとくに、見られたのでした。

一杯、また一杯と、飲んでいるうちに、すっかり頭の中にあつた考えというものが、空になつてしまいました。そこで、持ってきただけの金を、町の中で使いはたしてしまったのです。

彼らは、酒の酔いがさめきらぬうちに、まったく夢心地でこの町を立つて、出かけましたが、いつしか砂漠の中で、酔いがさめて、天幕のすきまから星の光を仰ぐと、はじめ、なにも持たなくては、いまさら故郷へは帰れないと思つたのでありました。

彼らは、ふたたび山へもどりしました。そして働きました。また岩を割ったり、土を掘ったりしました。

金がたまると、こんどこそは、故郷へ帰つて、みんなの顔をば見ようと思ひました。彼らは山を下つたのであります。

赤い町が、すぐ目の前に近づきました。彼らはサフラン酒の味を、思い出さずにはいられませんでした。

「もう、ふるさとに帰れば、飲もうと思つても、飲まれないのだから、一杯だけ飲んでよう……。」と思ひました。

美しい女たちは、悲しい、やるせない唄をうたいながら、酒場の前をあるいていました。若者たちは、夕焼けのように紅い、サフラン酒の杯を、唇にあてて味わっていました。一杯……もう一杯といううちに、頭がぼんやりとしてしまいました。そして、持っているものは、みんなこの町で費いはたしてしまつて、ついに故郷に帰ることができませんでした。

彼らは、やがて年をとり、氣力がなくなり、永久にふるさとを見捨てなければならぬのでした。

そして、砂漠^{さばく}のかなたに、赤い町^{あかまち}が、不思議^{ふしぎ}な、毒々^{どくどく}しい花^{はな}のように、咲き誇^{さかほこ}つてい
るのであります。

——一九二四作——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「童話」

1925（大正14）年6月

※表題は底本では、「砂漠《さばく》の町《まち》とサフラン酒《しゅ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

砂漠の町とサフラン酒

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>